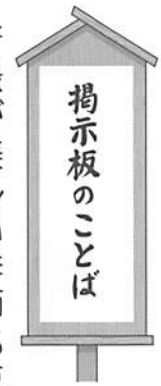
雨の日には雨の日の生き方がある

東井　義雄

『2025年難波別院カレンダー』6月のことば



新緑が美しい季節も束の間、もうすぐジメジメとした梅雨の時期がやってきます。雨の日に憂鬱な気分になるのは私だけではないでしょう。「外出するのに厄介だなぁ」と、つい愚痴も出てしまいます。子どもたちからは遠足や運動会が延期になり、「せっかく楽しみにしていたのに、勉強かぁー」と文句さえ聞こえてきます。

しかし、雨が降らなければどうでしょう。昨年の梅雨は、十分な雨が降らない上に記録的な暑さも続き、農作物は育たず、苗付けをしても暑さで駄目になりました。レタス、キャベツまでもが高騰し、大阪人のソウルフード「お好み焼き」が、我が家の食卓から何ヶ月も消えてしまいました。自然からの恵みである雨が大切なのは分かっているはずなのですが、つい自分の都合によって見方が変わってしまいます。

その時々の私の都合で、雨を疎ましく思う日もあれば、降れば「今日は庭木の水やりしなくていいわ。ラッキー」と喜んでみたり。都合でコロコロ変わるのは、梅雨のお天気ではなく私自身の心だったのです。そのことに、東井義雄さんの法語を通して、気づかせていただいたように思います。

足元が悪いと日々の買い出しが大変です。次の雨の日には、冷蔵庫整理を兼ねて「ある物お好み焼きパーティ」を子どもたちとしてみようかと思案中です。（大阪教区教化センター）

今月のことば

自利利他円満して
帰命方便巧荘厳
こころもことばもたえたれば
不可思議尊を帰命せよ

今回のご和讃の意訳として「自利と利他のこころを円満して、衆生に帰命させんがための仏の教えの、巧みな荘厳があらわれてくる。言葉も思いもおよばない不思議の仏をたのみとせよ」というように、私は受け取らせていただきました。

このご和讃では、自利と利他のこころを通して、人の中にひらかれてゆく仏に帰命せんとする心について教えられています。

まず、この「自利」と「利他」とはなにか、というところから考えます。「自利」とは、自らを利する、自分の利益のために利を追求すること、「利他」とは他者を利してゆくことを利益とする、他のもののために自らを動かしてゆくことと言えます。それでは「自利利他円満して」とはどういうさまを表すのでしょうか。自利と利他を円満する、つまりこの二つを一体とするということは、「他者を利することが自分の利となる」、そして「自分の利を求めることが他者の利につながる」ということでしょう。

言葉にしてみれば、一般的に人間的な美徳とされるようなことであり、理想的な関係のように思えることです。しかし、人間というものは、このようにして生きようとしてゆこうとすることが、たいへん難しい存在ではないか、と思います。

人間というものは、自分のためにも他人のためにも、何かを行うことに意味や見返りを求めてしまう、求めざるを得ないものです。自分のために何かをすれば、努力や払ったお金などに見合った結果や成果を求め、他人のために何かをすれば、してあげたことに対して相手からお礼の一つもなければ「この苦労はなんだったのか」、と不満足になります。

この自分の行動に伴わない現実とのギャップが、我々人間の心に苦として現れてくるのでしょう。この苦から離れた、自利だけでも利他だけでもない一体とされた仏の智慧を、ここでは「自利利他円満」とあらわされているのでしょう。

その後の「帰命方便巧荘厳」の「荘厳」とは、心の中にひらかれてゆくかたち、すがたを指す意味があります。仏の執着にとらわれない様を通して、そうしたあり方を我々の心に開き、帰命してゆきなさいと説かれているのが、この和讃であります。

（森川　善紀）

今月のことば出典『浄土和讃』
『真宗聖典』（初版）４８２頁
（第二版）５７６頁
『増補　真宗大谷派　勤行集』
（青本）１２１頁

〈知ってる？ 仏事のあれこれ〉

「葬儀」から頂いた事

～私のご命日～

東大阪市　德因寺　稲垣　直来

とことん愚痴る韋提希夫人と、その愚痴を黙って受けとめつつ、立ち上がる時を待つお釈迦様との対話が書かれている『仏説観無量寿経』に感化され、私のお寺では、思いの丈を語る「愚痴ゃ愚痴ゃの集い」を試みています。特に葬儀を通して色々な思いを教えていただきます。

ある男性は、「妻の闘病中、回復を祈願しお百度参りに何度も行きました。しかし妻が亡くなって思う事は、一番辛いはずの妻とどう向き合えば良いのか分からず、逃げていただけでした。後悔と申し訳なさで一杯です」とお話しくださいました。

またある女性は、「何故娘は自ら命を絶ったのか。何故あの時もっと向き合ってあげられなかったのか」と、答えの出ない問いに何年も苦しまれています。

また、「母はガンが見つかってから私の知っている母ではなくなってしまいました。毎日毎日罵詈雑言を聞かされる私は、母が怖くなり向き合うことができなくなりました。今思えば引き受け難い現実と闘っていたのだと思いますが、なるべく思い出さないようにしています。母の友人は良い母ばかり教えてくれるのですが、まだ受けとめる事が出来ません」と十代の女性も抑える事の出来ない内なる声を教えてくれます。

ある高齢男性は、「妻が亡くなって呼ぶ人がいなくなりました。ふと夜に妻の名を呼んでみるのですが、返事がありません。〝ハイ〟と応えてくれていた事がこんなにも有り難いことだったのかと、今さらですが感謝しています。しかしすごく寂しいです」と語ってくださいました。

「葬儀」の「葬」は、死という字の上下に草と書きます。大切な方の死を包み偲ぶという意味があります。ご家族は準備や参列者への対応などで、ゆっくりと偲ぶ事は中々難しいです。むしろ葬儀の後から、本当の意味での葬の儀が始まるのでしょう。

仏教では、亡くなった日を「ご命日」と言います。大切な方と別れたその日は、今まで見えていなかったものを見せ、考えてこなかった事を考えさせ、自分自身と向き合わせます。だから亡き方が与えてくれた「命・と向き合う私の日・」なのだと前述した方々が教えてくれています。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈239〉

そのままを受け入れる?!